平成 26 年３月　関西大学審査学位論文（要約）

関西大学大学院文学研究科総合人文学専攻

08D2013　藤岡　真衣

# 上方歌舞伎の形成と地方的展開

**【目　次】**

序
第１部　上方歌舞伎の形成と展開
　第１章　歌舞伎成立の諸相
　第２章　大坂における歌舞伎興行
　第３章　明治期における上方の歌舞伎興行―大阪を中心として―
第２部　上方歌舞伎の地方的展開
　第４章　地方における歌舞伎の諸相
　第５章　村の歌舞伎と地方で活動する役者たち―播磨を中心として―
　第６章　歌舞伎の上演を担う人びと―但馬を中心として―
結

**【研究の意義】**

本論文は、江戸時代以降の上方（京・大坂〔大阪〕）と各地における歌舞伎の上演の実態について、先行研究に再検討を加え、現地調査と諸資料の分析に基づいて解明しようとするものである。

上方歌舞伎に関する研究は、役者、脚本、興行、絵画、板本、観客などを対象として多岐にわたり、その研究蓄積も少なくない。さらに、上方役者による三都以外の地域での歌舞伎の上演についても近年研究が進み、各地の実態が明らかにされつつある。しかしながら、こうした多様な視点から検討される一方で、つぎのような研究の課題が浮かび上がってくる。

とりわけ、上方歌舞伎の形成に関する研究については、役者の芸風や脚本に関する検討のみならず、興行の制度や構造に注目した研究が試みられ、興行にたずさわった人びとの様相が明らかになってきた。とはいえ、それは江戸時代を中心としたもので、明治期以降については、資料の制約もあり、その実態が解明されているとは必ずしもいえない。

また、江戸時代以降、三都以外の城下町や門前町をはじめとし、各地で演じられた歌舞伎についても、さまざまな資料を手がかりとして研究が進展し、なかでも上方歌舞伎の地方へのひろがりがこれまで指摘されている。ただし、各地の村むらで上演された歌舞伎については、地域ごとの詳細な調査分析は進んでいるものの、上方歌舞伎の影響、すなわち、その地方的展開に関しては、いまだ不明な点が多いのが現状である。

本論文では、こうした課題について、第１部「上方歌舞伎の形成と展開」および第２部「上方歌舞伎の地方的展開」にわけて考察を行なった。

**【各章の概要】**

**第１部　上方歌舞伎の形成と展開**

**第１章　歌舞伎成立の諸相**

本章では、「かぶき踊」の成立について考察を加えた。これらに関する研究の蓄積は決して少なくないが、歌舞伎が形成される過程に迫る上で、この事項を検討することは、必要不可欠であると考え、改めてその実態について論述した。まず、かぶき踊が、「ややこ踊」という芸能の延長線上に成立し、慶長８年（1603）以降に演じられたものであることを、当時の日記などをもとに指摘した。かぶき踊の主人公となった「かぶき者」の実態とは、当時の秩序に馴染まず、京中の治安を脅かす存在であった。それにも関わらず、彼らの異様な振る舞いや服装が人びとの注目の的になり、やがて、そうした彼らの姿をまねる芸能者たちが現れ、かぶき踊を演じるようになったとした。

また、江戸時代初期の京における芸能の興行地の形成についても検討を行なった。四条河原が興行地として賑わいをみせるようになった理由として、当時、京都所司代に在職した板倉勝重が、四条河原に七つの櫓を許可したことが大きく影響していると推測した。さらに、「四条河原遊楽図屏風」を手がかりとして、当時の芝居小屋の実態を考察し、六条柳町の傾城屋たちが、遊女たちを舞台に出演させたことを述べた。

**第２章　大坂における歌舞伎興行**

本章では、江戸時代以来、大坂の興行地であった道頓堀に注目し、興行地の形成・興行の構造・興行と行事の３つの視点から考察を加えた。

まず、興行地の形成について、江戸時代初期の大坂おける歌舞伎の上演の様相に言及した上で、道頓堀に芝居が設置されるに至った目的とその時期を再検討した。その結果、慶長期末から寛永期初めにかけての大坂では、歌舞伎の上演場所もそれほど定まっていなかったこと、そのような状況下で、元和元年（1615）に道頓堀が完成し、少なくとも寛永３年（1626）頃には芝居が「所繁昌」を目的として設置された可能性が高いことなどを指摘した。

次いで、大坂における興行の構造について、名代が成立する過程を検討し、名代・芝居主・座本・銀主が深く関わることで興行が成り立っていたことを、諸資料に基づいて明らかにした。

さらに、興行に関わった人びとの実態を解明するため、道頓堀川で行なわれた歌舞伎役者の「船乗込」に注目して、この行事について検討を加えた。乗込とは、役者が興行地に入り、挨拶することを意味し、もともと顔見世興行を前にして江戸で始められた行事であることを述べた上で、大坂における乗込の変遷を考察した。その結果、大坂独自の船乗込が恒例となったのは 18 世紀末頃である可能性が高いこと、そして、船乗込に不可欠であったのが「迎え船」の存在であったことなどを指摘した。この迎え船には、贔屓連中や太鼓持、茶屋中、料理屋中が乗り、さまざま立場の人びとが役者や興行などを支援していたことも示した。

**第３章　明治期における上方の歌舞伎興行―大阪を中心として―**

明治期における大阪の歌舞伎興行の実態について、役者の活動や演目の内容、興行方法のあり方などに大きな変化をもたらした演劇改良の動きに着目し、考察を加えた。はじめに、明治初期の時点で、歌舞伎に対してどのような政策が打ち出されていたのかを、大阪府の布令を通して検討した。そして、明治 19 年（1886）８月に東京で発足した演劇改良会の影響をうけて、同年９月に大阪でも演劇改良会が結成されたことにふれ、この動きがきっかけとなり、大阪での演劇会社設立に結びついていったことを明らかにした。

明治期から大正期にかけての大阪における興行や劇場建設の実態を明らかにすると考えられる「大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料」が、平成 24 年、関西大学大阪都市遺産研究センターの所蔵するところとなった。これらの資料の概要について述べた上で、大阪の数かずの劇場の建設にたずさわったのが、建築請負業と大道具師を兼ねた中村儀右衛門であることを確認した。なかでも、明治 31 年（1898）に開場した梅田の劇場「大阪歌舞伎」に関する資料が含まれていることは、きわめて貴重である。なぜならば、この劇場は一年足らずで焼失したため、不明な点が少なくないからである。これらの新資料を手がかりとし、当時の新聞記事なども調査の対象として検討した結果、この劇場が、大阪の演劇改良の拠点となることを目的として建設されたこと、その建設には中村儀右衛門がたずさわっていたことなどが明らかとなった。これらのことから、「大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料」が、明治期以降における大阪を中心とする劇場建設の実態を知る重要な資料群であると位置づけた。

**第２部　上方歌舞伎の地方的展開**

**第４章　地方における歌舞伎の諸相**

本章では、地方における歌舞伎の上演について論じた。まず、17 世紀前半に、歌舞伎が地方へ伝播していったことを述べ、やがて、三都以外に興行地が形成され、歌舞伎が上演されるようになっていったことを、上方役者などが巡業した実態を通じて明らかにした。

また、役者たちによる巡業の一方で、歌舞伎は各地の祭りと深く結びつきながら上演されてきたことが、これまでの調査・研究で明らかにされてきた。そのため、現在においても各地の祭りのなかで伝承されている歌舞伎に注目し、それらの事例について現地調査を行ない、その様相をまとめた。その結果、各地における歌舞伎については、その上演方法が必ずしも常設の舞台に限らないこと、他の芸能と影響し合いながら独自の形で上演されるようになっていったことなど、その実態がきわめて多様であることを指摘した。そして、歌舞伎がどのようにして祭りのなかで上演されるようになっていったのかについても、諸資料に基づいて検討を加えた。

**第５章　村の歌舞伎と地方で活動する役者たち―播磨を中心として―**

本章では、江戸時代以降の播磨における歌舞伎の上演について考察した。まず、江戸時代初期の上演の状況を日記の記事などから検討し、少なくとも寛文８年（1668）には、上方や江戸の役者たちが播磨の地を巡業していたことを指摘した。その一方で、18 世紀後半までには、東高室村（現加西市北条町）を拠点とする役者たちが現れ、明治期以降も活動していることに言及した。また、高室の役者たちによる巡業が各村に与えた影響について、甘地村（現神崎郡市川町）の事例を挙げ、村人たちが自身で芝居を演じるようになっていったことを述べた。

さらに、明治期から大正期にかけての播磨における村芝居の実態を考察するため、兵庫県宍粟市一宮町河原田の農村芝居堂と同町福野の歌舞伎舞台に着目した。これらの舞台には墨書銘が残っていることが確認でき、その地域の村芝居の実態を明らかにする重要な手がかりとなることから、それらを翻刻し、その内容について検討を加えた。その結果、墨書銘は、明治期から昭和期にかけて書かれたものが多いことがわかった。そして、その内容は、上演の年月日をはじめとし、役者・浄瑠璃の太夫・三味線奏者・振付師・一座の名前、さらには歌舞伎の演目名などを記したものであることが判明し、こうした具体的な事項がわかることで、村芝居の実態がより一層明らかになることを指摘した。

**第６章　歌舞伎の上演を担う人びと―但馬を中心として―**

本章では、江戸時代から明治期にかけての但馬における歌舞伎の上演について考察した。その結果、17 世紀後半には、但馬の各地において、上方役者が巡業を行なっていたことを日記などから明らかにした。やがて、18 世紀後半なると、気多郡堀村（現豊岡市日高町）を拠点とする「手辺歌舞伎」が各地で芝居を演じていたことを述べ、明治期以降における歌舞伎の上演については、明治 34 年(1901)に開業した芝居小屋「永楽館」(現豊岡市出石町）の事例を通じて、その実態を考察した。

さらに、江戸時代末期から明治期にかけての但馬における歌舞伎の実態に迫るため、葛畑村（現養父市葛畑）に着目した。葛畑村では、明治３年（1870）に村人たちが「葛畑座」を結成して歌舞伎を上演していたことから、当時の歌舞伎に関する資料を多く保存している。そのなかでも、同地に伝わっている「歌舞伎衣裳染物絵見本」２冊の内容を検討し、これらの本と同地に残る歌舞伎衣裳３点の文様との関係を分析した。これらの分析から、２冊の本は絵を学ぶための「絵手本」として、江戸時代、広く用いられていた板本であり、こうした本を活用して葛畑村の人びとが衣裳を制作していた可能性が高いと結論づけた。こうした衣裳やその制作に関連する資料などにも注目して今後は調査を進めることが、地方における歌舞伎の実相を明らかにする上で必要不可欠であることを述べた。

（以上）